セントラルケンタッキー日本人補習校　　令和６年（2024）２月 10 日

ＣＫＪＳだより

第 78 号

校長　松平　昭二

shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

「笑顔」の力

赤ちゃんは、10 ヶ月を過ぎた頃から歩けるようになり、動きが活発になり表情も豊かになってきます。我が子が誕生して２ヶ月足らずの頃、眠りながらふっと笑顔を見せる瞬間があり驚いたことがあります。また、笑顔が見られるのがうれしくて、盛んにあやしていたものです（あやしていたのは、もう少し大きくなってからのように記憶しています)。

生後１ヶ月くらいで見せる赤ん坊の笑顔を「生理的微笑（新生児微笑）」というそうです。誕生後、泣いているか寝ているしかできない赤ん坊が、ふっと笑顔を見せるのは、親に可愛がって育ててもらうための本能の微笑みだといいます。このときの笑顔はもちろん意識して作られたものではありません。「生理的微笑」をすることで、周りの大人が笑顔になり、優しくなる。この体験を通して、この表情は役に立つらしいと学習し、笑顔を繰り返すようになっていくのだというのです。

大人でも、笑顔の似合う人は世の中にたくさんいます。いや、笑顔はどの人にとっても、その人の一番すてきな顔に違いありません。もちろん、学校においても「笑顔」の存在は欠かせません。「笑顔」のあふれる学校であるか否かは、教育活動を評価するバロメーターにもなるでしょう。子どもたちの笑顔の輝きは、教師からの適切な働きかけによって、自尊感情が生まれているときこそ本物となります。そして、教師自身も子どもたちから「笑顔」の力をもらい、次の教育活動への意欲と情熱を燃やすことができるのです。

時は 2 月、今年度の教育実践の振り返りを行っているところです。明るく元気のある校風を生み出す力は、校長や教職員の一挙手一投足に負うところ大です。そして、「笑顔」の力を糧に、学校に関わる全ての人がそれぞれの良さを発揮できるよう、慌ただしい年度末をチームワークによって力強く乗り越えていきたいと考えています。

本校の教職員や子どもたちも、笑顔が似合っているでしょうか。一人で何気なく鏡に向かうとき、校長としてのすまし顔をつくる前に、さりげなく「自分の笑顔」を振り返ってみます。校長自身が、教職員や子どもたちに力を与えることのできる自然ですてきな「笑顔」になれているだろうかと‥‥。